沖縄県看護協会 会長 平良孝美 先生

間仁田先生　先生は、2021年6月から沖縄県看護協会会長にご就任されております。遅ればせながらご就任おめでとうございます。

ご就任に当たってのご感想等をお聞かせください。

平良会長　もうまる3年になります。

私は、2021年6月から会長に就任しましたが、その頃はコロナの真っ盛りの時期でした。コロナ禍で混沌としている時期で、2年間はコロナの対応に奔走しておりました。本会の本来実施するべき事業も行いつつ、県と協力しながらコロナの対策として看護職を感染者の待機施設や保健所、クラスターが発生している施設に派遣するなど、だいぶ手間がかかりました。

間仁田先生　我々の業務が止まっちゃうと出来ないのではないかと思う事もあった中で、看護師さんが様々なところで様々な部署に配置されてという意味で、そのような整備が一番大変だったのではないでしょうか？

平良会長　そうですね。

沖縄県では一時、医療従事者がコロナ患者や濃厚接触者となることで現場を離れるという事態が起きまして、第5波から7波にかけては看護職の不足が生じましたので、国の要請で全国から多くの看護職が応援に来てくれました。また、日本看護協会のルートで応援に来られる方もいましたので、その調整やクラスターが発生した高齢者施設等への人材配置に、苦労しました。

その時にすごく心強く感じたのが、訪問看護の方々でした。規模の大きな病院では、通常の診療と併せてコロナの重症患者も診るという状況でしたので、施設等に必要な看護師を応援に出すこと自体が困難でした。一方、訪問看護では、コロナの影響で訪問件数が減少していまし

たので、訪問看護の方たちを何とか現場に入っていただけないかという交渉をしたところ、ご快諾下さり施設等の応援に入っていただけました。看護の力強さ、現場の力を見せていただけたと感じております。

他にも、コロナ禍では看護管理者をどうやって繋げていくかというのに力を入れておりました。例えば、コロナの患者さんたちを受け入れていた重点医療機関27か所の看護部長さんたちとはメーリングリストで繋がる仕組みを作りました。現場が大変な時に私たちは現場にいないので、どの様な状況なのか情報発信が無いと分りませんので、動きようがありません。27か所の看護部長さん全員にZoomで入っていただいて、会議をしたこともありました。

現在は、県内のあらゆる場で働いている看護管理者と繋がるための方策を模索しているところです。情報が無いところでは課題が見いだせないし、効果的な動きも出来ないと思います。まずは、どの様に情報を集めるかというところから繋がりを求めていろいろと取り組んでいるところです。

間仁田先生　私は群馬県出身なのですが、大学は琉球大学卒で、妻は看護師をしております。妻が那覇看護学校の学生の時に知り合いました。

先ほどお話のあった訪問看護をやっていた時もあるのですが、今は重症心身障害児者の方でやっております。まさに様々なところに看護師がいて、実際にはつながっていないようなところなのかなと考えておりましたが、コロナの時は訪問看護の方たちも支えており、今後高齢化社会になっていった時に大事な存在なのかなと思いました。

平良会長　そういう事は必要になってくると思います。

私は、頼ってもらえる看護協会というのを最初から目指しております。看護管理者は大きな規模の病院だと看護部長だけではなく、副部長がいて、複数で看護部の運営をしているので、相談は出来るのかなと考えますが、施設によっては看護部長１人で組織管理にあたり、誰と繋がってよいのかもわからず、悩んでいる方も少なくないと思います。

ですから、誰からでも「何かあれば看護協会に聞いてみよう」という存在になれれば良いと思っています。

間仁田先生　コロナをきっかけに良い繋がりが出来て、コロナが明けて、今後どのように繋げていくかがとても大事ですね。

平良会長　そうですね。

看護管理者の力量は組織に大きく影響します。私たちは、沖縄県で働いている約２万人の看護職１人１人に手を差し伸べるわけにはいかないので、看護管理者の皆さんをどうにかレベルアップして、その人たちでスタッフを引き上げていくことに注力をしなければいけないと思っています。看護管理者の教育については、日本看護協会でも検討されているところです。

間仁田先生　私は妻が看護師で、職場の看護師にも色々聞いてまして、皆さん看護協会に所属しているとおっしゃっています。

看護協会全体として今後も力を合わせるのが良いと考えております。

基本的な活動内容等についてお聞かせください。

平良会長　看護の質を上げていくことが大きな事業の１つです。質を上げるために、研修事業を年中実施しております。長期や短期、半日程度の研修と様々です。１人１人の看護職が、必要な研修を自分のレベルに合わせて受けていくという研修を数多く企画しています。

喫緊の課題として、看護管理者の質の向上があげられます。教育を受けた看護管理者と、経験や勘に頼ってやっている看護管理者ではやはり違いが出てきますので、特にリーダーの教育

はこれからも力を入れていかないといけないと思っています。

また、人材確保がだいぶ厳しくなってきましたので、職場環境の整備と、人材確保や離職の防止のための活動をしているところです。これらは、本会が県からの指定を受けて運営しているナースセンターが中心となって実施しています。

もう１つは、地域における健康危機管理体制の構築です。4 月に法制化されました災害支援ナースの育成も日本看護協会と連携して行っております。

間仁田先生　災害時には真っ先に協力していただいており、出口先生からもお礼のお言葉がありました。

平良会長　こちらこそ、先生にはいつもお世話になっております。

私たちは普段から、感染もそうですが、自然災害等の災害時には看護師が絶対必要になると考えておりますので、その準備をしているところです。4 月からの医療法の改正もあり、災害支援ナースが法律の中で、DMAT と同様に活用される事となりました。

災害支援ナースを養成して、登録名簿を県と日本看護協会とも共有をして、何かあった際にはまずは県内で対応し、要請があれば県外への派遣調整を行うことになります。

本会では、今年度も 80 人程度養成する計画を立てています。今後数年で、200 人を目標にできると考えています。

間仁田先生　少ないよりは多くいる方がいいですよね。

平良会長　そうですね。

規模が大きな病院に災害支援が出来るナースが多くいても、その病院が看護人材不足に陥ると応援が一人も出せないという結果になり得ます。例えば、災害支援ナースが 100 人いたとして、100 人が 50 か所に分散しているのと、100 人が数か所の施設にいるのとでは、実際に災害が起こった時の動きは全く違ってくると思うので、協力できる施設を出来るだけ増やしていく方が良いとコロナ対応を通して学んだところです。

間仁田先生　確かにそうですね。

皆さんで共有できますしね。

平良会長　そうですね。

規模が小さいところでも、支援が出来る看護師さんを育てていただけるようにしてもらえれば、災害の時には自分たちの県である程度のところは賄えるかなと考えております。特に沖縄県は離島県ですので、自前である程度の期間対応できるようにしないといけないと思っております。

間仁田先生　先ほどの話の離職者等について、高齢化社会になってきて、30 年前は研修医が採血をしたりしており、看護師は何をしているかと聞くと、看護だと言うんです。

ですが、今の状況は、看護をやりたいが介護がメインになっており、高齢化社会になってきている中で、介護と看護をどう考えていくかというのを基から考えていかないといけないのですが、本来やってきた看護というものがなかなか出来ないので、そういうストレスを持っていて、どの様にしたらもっと働きやすく、本来の目標にしてきたものが出来るのかなというのは、

平良会長から見るとどの様に感じておりますでしょうか。

平良会長　私たちは、「保健師助産師看護師法」という法律の中で、身分や免許について規定されております。その中で、臨床の看護師で言うならば、大きく分けて２つの業務があって、１つは診療の補助、もう１つは療養上の世話です。

療養上の世話は、特に医師の指示が先行しなくても自分たちで計画して自律性を発揮して支援が出来る部分なのですが、現在はどちらかというと、拡大しているのが診療の補助の部分ではないかと思います。１人１人の患者さんの健康状態、あるいは疾病の具合や治療等を色々考えて、患者さんたちの生活の支援をし、地域に戻していくという活動が思いっきりできなくなっているのではないでしょうか。

高齢化が進んでいるという事で、お年寄りが多くなってくると、支援に多くの手が必要になります。１つ１つの看護の行為に時間を要するため、それをじっくりこの方のペースでやってあげられないというストレスはかなりあるかなと思います。人手はこれまで以上に必要になってきていると思われます。

看護の仕事をどこかにタスクシフトするとなった時には、介護士さんであったり、看護補助者の皆様にお手伝いいただかないといけないのですが、何せそこも人が不足している状況です。

間仁田先生　確かに、様々な人が雑多に入って来ざるを得ないと思わない状況になっておりますし、那覇市立病院にも、ミャンマーの子たちが 10 人ほど来ておりまして、介護をメインで色々と手伝ってくれています。

平良会長　これは協定を結ばれた方々でしょうか。

間仁田先生　どこかと契約をしてやっているかと思います。みんな 20 代で、私の病棟にも 4 人来ていますが、1 人は 20 歳の子でした。

日本語もしっかり喋れるし、患者さんに対しても非常に優しい感じでやってくれているので、今は、海外からも受け入れていかないといけない時代になってきています。悪い事ではないのでしょうけど、中にはちょっとと思う人たちもいます。

平良会長　そうですね。

やはり文化も違いますからね。

あとは人じゃなくても良いところは機械や、やり方を変える等の対策をしなければならないし、いる人数でどうにか物事を進めないといけない時には、働き方の改革が必要になってくるのかなと思います。ちょっとした工夫で時間が短縮できたり、効率が上がる可能性があります。

夜勤が出来ないとダメとか、フルで 8 時間働けないとダメだとか、こういう事にこだわっていたら人が集まらない。様々な事情があってフルで働けないという方々の中には、能力があり、資格もある方がたくさんいると思いますので、その人たちをどう活用していくのかを考えないといけないと思っています。

新しい発想で進まないと、人の確保が難しい時代になってきていると思います。技術職が一度職を離れてしまうと、技術に不安が出てきます。知識の部分もだいぶ変わっていますので、本会では潜在看護師の教育をしております。知識の補充と、実技を行い、個々の希望と求人施設とのマッチングをして紹介をしています。

そこをもう少し活性化させていかないと間に合わないと思っているところです。

間仁田先生　確かに、潜在まで入れると実際はいるはずだなと思うのですが、やはり結構ハードな仕事なので、別の仕事をしてたりする人もいるくらいだと思っています。

平良会長　そこは課題だと思います。

2025年はもう来年ですので、今、沖縄県の高齢化率が21パーセントを超えておりますので、入院して来る患者さんはだいぶ高齢者が多く、特に後期高齢者の方が多いと聞いています。

間仁田先生　3分の1くらいは90代くらいになってきていますしね。

平良会長　高齢者の特徴で、合併症を起こしやすいし、重症化してから様々な不具合が出てきたりして、動作についても若者と同じではないので、そこを考えると、看護の人手が必要になります。

2025年もですが、2040年も課題が多いと考えると怖いです。

間仁田先生　そうですね。我々の世代が第2次ベビーブームで最後のベビーブームになります。

平良会長　私も確実に後期高齢者になっていますので、生きているとお世話にならないといけない立場になります。その頃に生活の場や医療の場はどうなっているのでしょうか。病院完結型から地域完結型にシフトしてしばらく経ちましたが、沖縄県が描く地域医療構想が実現しつつあるのかは気になるところです。

訪問看護や訪問診療の充実、あるいはかかりつけ医の制度をきちんと整えたりというのは必要なのかなと思っています。大きな病院に頼ると、そこの皆さんが大変ですよね。

沖縄はどちらかというと本土と比べて、県民の大きな病院を受診するハードルが低く、救急のコンビニ受診の様な利用も問題となっています。そこは、医療者側だけではなく、行政も一緒になって県民に教育が必要なのかなと思います。

市立病院の小児科がだいぶ疲弊しているのも、頑張りすぎている結果だと思いますし、役割や使命を果たすために医療者が疲弊してしまう事はよくないですし、医療の提供体制を崩すことになります。

そこは懸念しているところではあります。

間仁田先生　結局頑張って来ても最後は穴が開いちゃうともったいないですよね。

群馬から来て、戻って働いて、またこっちから妻を連れて行って、戻ってきましたが、やはり違いがあって、群馬だと、3つ4つの県をまたいで子供が受診したり、18時19時くらいまではいわゆる開業医の小児科が頑張ってくれるので、ほとんどそこで済んだりします。それが、沖縄に来て当直をするようになって覗きに行ったら、子どもがいっぱいいますし、あの現状はおかしいと感じました。それでも結構充実していて、小児科の先生方もいっぱいいたので何とかなっているんだなという様には思っていました。

平良会長　これは県民教育をもう少ししないといけないところですよね。私はずっと県の職員でしたので、退職時は県立南部医療センター・こども医療センターでした。あちらも夜間救急の7割は小児でしたので、どうにかならないものかなというのは常々思っていました。

間仁田先生　小児科も少し話を聞いたら、ちょっと盛り下がった時もあったりで、色々頑張ってきましたが、2つとも盛り下がってしまうと、本当の人たちがどこに行ったらいいのかという時間帯が出来てしまいますよね。

平良会長　夜間の救急も効率的に回していかないといけないのですが、これは医療側だけが考える事ではなくて、行政一体となって提供体制を考えないといけないと思います。

間仁田先生　遅い時間からの方が重要なので、遅い時間からの人たちが働けるように、人手がいるところで代わりばんこでやるのも良いかと思います。那覇市立病院でもそうですが、たくさんの人を診るのに、夜間２人や３人の当直を置かざるを得ないので。

平良会長　そうですね。夜起きて働くこと自体が身体に負荷はかかりますし、精神的にもやっぱり参ってしまうので、整えていくのはこの先必要だと思います。

間仁田先生　そうですね。人材もいっぱいいても、疲れていたら逆に抜けてしまいますしね。

平良会長　医療人材の確保については、2025年も心配ですが、2040年がさらに心配です。

間仁田先生　沖縄は20年くらい高齢者が減らないのでますますですよね。

平良会長　そうなんですよ。

ここをどう乗り切っていくかという事と、私たち看護の立場から言いますと、予防活動のところですよね。健康寿命をどう延ばしていくか、人の手を借りずに高齢者になっても自分の身の回りのことができる高齢者をいかに増やしていくかというところに注力しないといけない。治療をしながらでも地域である程度自分の事は出来るという高齢者をどう作っていくかですね。

本会の活動の１つに「まちの保健室」と言って、これは沖縄県と郵政と本会の３者でコラボして行っているものですが、本部や羽地、与勝、糸満の郵便局で、まちの保健室事業を行っています。

地域に本会の会員がいますので、その人たちが週に１回、健康相談や介護の相談、子育ての相談を行っています。骨密度を図り、血圧をチェックしながら相談を受けています。必要な人は行政に繋いだり、あるいは受診勧奨をするなど、地道に活動しているところです。

看護の介入が出来る場を拡大していく１つの手段が、「まちの保健室」です。

間仁田先生　様々な新しい取り組みで、様々なことを取り組んでいかないといけないですよね。

平良会長　そうなんですよ。

これからは、急性期から在宅に至るまで、人々の健康をどう支援していくかが看護職にも問われると思っております。健康長寿県の復活という県の方針でもありますので。

間仁田先生　ありがとうございます。

私は現在カテーテル検査等を行っているのですが、カテーテルの部屋にいる看護師の危険手当が少ないと聞いています。

お金じゃないのは分かっていますが、病院によって待遇が違うにしても、もう少し貰っても良いのではないかと思う方もたくさんいます。

私は医者なので、それなりに貰っていますが、様々な働き方があって、若干不満はあるのですが、医者は少し下げても良いので、看護師を上げて欲しいという事で、危険手当をつけてあげても良いと考えますが、平良会長はいかがでしょうか。

平良会長　以前から、日本看護協会は看護職の処遇改善に力を入れて取り組んでおりました。令和4年度はコロナに対応する医療機関の看護職の賃金引き上げを図るための措置が国によって実施されました。また、国家公務員医療職俸給表（三）が改正され、看護職員の処遇改善に向けて一歩踏み出す好機を得ました。医療職俸給表（三）を参考に給与表が作られている公立の病院では早々に対応したところもあるようですが、公立病院を参考にしている民間の病院への波及は時間を要するかもしれませんが、期待しているところです。

看護管理者の皆さんに期待することは、この度の診療報酬改定も踏まえて、このチャンスを逸することなく、様々なデータを集めて病院経営陣と看護職の処遇に関する検討を行って欲しいと思います。

しかし、施設によっては給与表自体が作成されていないところもあると聞いていますので、そのような組織の看護管理者支援については課題であると思います。

日本看護協会の調べによりますと、医療職の中で看護職は、入職したての頃は他職種に比較して賃金は高い水準ですが、5年10年経ち、35歳くらいになると他職種がどんどん伸びていき、追い抜かれてしまいます。賃金曲線がだんだんと緩やかになっていき、55歳以降は全く伸びません。

間仁田先生　一緒に働いていますので、楽しく働いてもらうには、仕事に応じた賃金を貰ってほしいです。

昔は看護部長さんが真面目で、病院が払えないから超勤無しと言っているのを耳にしましたが、現在は、超勤が無いと終わらない状況で超勤無しというのはあり得ないです。みんなで少しずつ改善できるようにしていきたいですね。

平良会長　ありがたいです。

先生のようなお考えの方が沢山いらっしゃると良いなと思います。

間仁田先生　私は看護師さんがいないと仕事が出来ないタイプでして、逆に超勤の原因になっている先生と言われるくらいに仕事が遅いです。

平良会長　循環器は患者さんが次から次に来ますからね。

間仁田先生　そうですね。指示するときに迷惑をかけてしまっています。

夜勤もないので、夜勤をしている人たちよりも給与が下がってしまっています。それでも楽しく働いてくれているのが非常に面目ないと思っています。

平良会長　小さいことからでも少しずつ変えて行ければ良いと思います。

間仁田先生　頑張っていると、少しでも良いことがあるんだという様に思ってくれるだけでも良いと思います。

平良会長　処遇を改善しなければ、その組織で長く働こうと思わないと考えます。ですのでとても大切だと思います。

間仁田先生　県立や市立など、大きな組織になればなるほど難しかったりすると思います。

平良会長　そうですね。
職員定数ですら条例で決められているくらいですので、給与の改定はなかなか難しいところはあると思います。
だからと言ってそれで良いのかというとそれは違うと思うので、じわじわとやっていただければと思います。

間仁田先生　ありがとうございます。
沖縄県医師会へのご意見や一緒にやってみたいこと等ありますでしょうか。

平良会長　私たちは4師会と言って、近くに医師会、歯科医師会、薬剤師会があるので、沖縄県の健康フェア等に一緒に出させていただいたりしておりまして、その中では、医師会さんにはリーダーシップを発揮していただいているので、今後とも連携を取りながらやっていただければと思います。
この先は地域医療構想を計画通りとは言わないまでも実現し、高齢者の療養の場の問題も含め、地域で様々な健康状態の人に対応できるようにしなければいけません。地域包括ケアが上手く回っていく基盤づくりは、医師にかかっているところも大きいと思いますので、医師会さんにはそこでのリーダーシップも期待するところです。
大きい病院や小さい病院、訪問看護の様に職員が2.5人から開設が出来るところであっても、地域に必要とされるから生き残れるのだと思います。具体的な構想等のお話は全然できませんが、地域の中でお互いが繋がっていけるシステムがあれば良いと考えております。
医師会さんとは、沖縄県の保健医療について話し合い、ともに考えていけたらと思います。

間仁田先生　ありがとうございます。
最後に、日頃の健康法、趣味、座右の銘等をお聞かせください。

平良会長　健康に良い事は全くやっていないです。元々がものぐさなので、たまに気が向いたときに犬の散歩に行くくらいです。
趣味は、全くのインドア派なので、読書が好きです。様々な本を読みたいです。
それと、沖縄にはあまりありませんが、仏像の鑑賞は私のストレス解消です。神社仏閣が大好きなので、詳しくはありませんが、癒されるという意味で年に1回は絶対に仏像を見ないとだめです。

間仁田先生　推し仏等はありますでしょうか。

平良会長　私は、奈良の山奥にある室生寺というお寺で、女人高野と言われているお寺なのですが、室生寺の十一面観音菩薩立像が大好きです。仏像を前にすると落ち着きます。お寺に行くと、何回も同じところを行ったり来たりするので、私とお寺に行くことが夫は嫌みたいです。

間仁田先生　同じところを行ったり戻ったりしているんですね。

平良会長　さっき見たよね。と言われますが、何度も行きつ戻りつしています。お寺に泊まれるんじゃないかと思うくらい好きなんです。歴史を感じられるところに惹かれるのかもしれません。沖縄は戦争で様々なものが焼けてなくな

りましたので、歴史を背負った仏像がいないので、京都や奈良に行っています。

間仁田先生　確かに、京都や奈良だと、どこに行っても神社がありますしね。

平良会長　そうですね。
効率が良いのは京都です。奈良は良い仏像、古い仏像等様々なものがありますが、距離が離れているので、時間が必要になります。あまり時間が無い時は京都に行きます。

間仁田先生　座右の銘等はありますか。

平良会長　私は、人が成長する為には負荷が必要だと思っています。私自身にも掛けますが、スタッフにも気づかれないように負荷を掛けたり、こんな負荷を掛けるよと言って役割を与えたりしていました。人間が重力に抗って生活することで筋肉や骨量が保てるように、仕事上の能力や精神面も負荷を掛けながら成長するものと思っています。
そして、生き残っていく事は、人としても組織としても必要なので、変化する。変化する事を恐れない。よくダーウィンの進化論と重ねて言われますが、決して賢い人が生き残るわけではなく、強いものが生存していくわけでもない。最後まで残るのは、変化できた人、変化ができた組織だと考えます。地域や世の中を見ながら変えていくべきものは変えていかないと、組織も生き残れないだろうし、人としても必要とされる人ではなくなると思っています。

間仁田先生　非常に参考になります。
面倒くさがりだったりする中で、何もしないと面倒くさがりのままで、何かを背負い、やるしかない立場になると、とりあえず少しでも頑張らないととなる気がします。

平良会長　そうなんです。
私も、この役割は傍から見て大変そうだと怯んでいましたが、引き受けたからには、これも私自身への負荷ですので、役割を遂行する中で成長していければ良いと考えています。

P R O F I L E

昭和 56 年	自治医科大学附属病院
昭和 59 年	沖縄県立那覇病院
平成 3 年	沖縄県立沖縄看護学校
平成 12 年	沖縄県立浦添看護学校
平成 14 年	沖縄県東京事務所
平成 15 年	沖縄県福祉保健部医務国保課看護係
平成 18 年	沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
平成 27 年	沖縄県病院事業局県立病院課
平成 29 年	沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
令和 2 年	医療法人真徳会　沖縄メディカル病院
令和 3 年	現職

公益社団法人 沖縄県看護協会

間仁田先生　ありがとうございます。
非常に参考になり、大変勉強になりました。

平良会長　医師会さんとは今後とも色々とコラボしてやっていけるようなところもたくさんあると思いますので、今後ともよろしくお願い致します。

インタビューアー：広報委員　間仁田　守